

場所の芸術（2）—第14回～第31回幻聴音楽会

The Arts in Place (2) — From the 14th to the 31st Genchō Concert

野村 幸弘

Yukihiko Nomura

はじめに

私は「幻聴音楽会」と名付けたアート・パフォーマンスを1995年から始め、2013年までの19年間に31回開催した。その第1回幻聴音楽会から第13回の「雑踏の音楽」までの内容については、1999年に「幻聴音楽会とは何か—音楽の場所と聴取形式の問題について」という拙論に書いたので、本稿では、それ以降、2000年の第14回「階段の音楽」から第31回の「1.7kmの音楽」までについて、それらのアート・パフォーマンスがどのようにして実現したのか、その経緯と社会的な関わりについて論じることにはしたい。⁽¹⁾

第14回幻聴音楽会—階段の音楽 2000年7月8日

2000年に、岐阜市の長良川国際会議場で「アスペン国際デザイン会議 in Gifu 2000」が開催されることになり、その企画推進メンバーになったことから、私はこの国際会議のオープニング・イベントとして幻聴音楽会を行うことを提案した。

1995年に安藤忠雄が設計した長良川国際会議場は、大階段と巨大な卵形の会議場を組み合わせた特異な形状で、長良川北側の右岸に面し、対岸には金華山と岐阜城がそびえるという広大な眺望に恵まれた立地に建てられている。高瀬川との親水性を特徴とする京都木屋町の「TIME'S (タイムズ)」（1984年）から、大阪湾へのアクセスを重視した大阪天保山のサントリーミュージアム（1994年）を経て、安藤は長良川国際会議場では屋根全体を大階段で覆い、長良川とのつながりを作ろうとしたが、川へのアクセスは堤防道路で寸断され、親水性を獲得するところまでは行かなかった。

この大階段は、ローマのトリニタ・デイ・モンティ聖堂からスペイン広場へ降りるあの有名な階段を模していると思われるが、残念ながら、長良川の花火大会以外、ここにはスペイン広場の賑わいや活気はふだんまったく見られない。ただ大階段を上り詰めた屋上からの眺めは絶景で、古代ギリシアの円形劇場から見渡す地中海の風景にも匹敵する。したがって私はその景観を堪能する方法や機会がないかとかねてから考えていた。

そこで、この場の素晴らしさを再発見、再認識するために、遮るもののまったくない金華山と長良川のパンノラマを真正面に見られるよう、客席を屋上に設定した。一方、演奏家は、観客から姿が見えない大階段の下から演奏しながら上ってくるという演出を考えた。プログラムは、幻聴音楽会の常として、この場所の特性を最大限に活かした曲で構成した。その主な内容は以下の通りである。

○「見えない楽団」 指揮者がひとり階段を上って来て屋上に現れ、観客に一礼した後、背後の金華山の方を振り返り、タクトを振り始める。その指揮に合わせて階段下の吹奏楽団が演奏を始める。観客には金華山に向き合う指揮者の後ろ姿しか見えないが、演奏は階段の下の方から聞こえてくる（図1）。（作曲：佐藤寿恭 指揮：長谷川季之 演奏：広神戸ウインドアンサンブル）

○「共時シンバル」 シンバル奏者2人がシンバルを鳴らしながら屋上に現れ、向き合って二重奏の即興の掛け合いを行う。次に互いに背中を向けて、相手の出す音だけをたよりに演奏する（図2）。（シンバル即興：



図1 「見えない楽団」



図2 「共時シンバル」

片岡祐介 若松博文)

○「増減の音楽」 楽器が少しずつ加わって行くラベルの「ボレロ」を空間的に変換し、演奏家がひとりずつ階段下から屋上に現れ、全員が屋上に出揃ったあと、今度は、ハイドンの交響曲第45番「告別」のように、演奏家がひとりずつ階段を下りて去って行く(図3)。(作曲：山辺義大 演奏：広神戸ウインドアンサンブル)

このように金華山を借景に、大階段と屋上を舞台にすることによって、そこで演奏される音楽は「下から上へ」「上から下へ」「遠くから近くへ」「近くから遠くへ」というように、空間的なクレッシェンドとデクレッシェンドを生み出すことになった。私はこの「階段の音楽」で、音の上下運動と遠近法といった音の空間的特性を顕在化させ、コンサートホールの固定的で静的な音のあり方を自由で動的な空間へと解放することを試みたのである。

ほかにも合唱団とハンドベル隊が交錯したり、舞台上で演奏家同士の実際の結婚式が挙げられた。式の最後には「アスペン国際デザイン会議」を共催する中日新聞社に掛け合って、ヘリコプターから2人に花束を投げ渡すという演出も行った。コンサートのフィナーレは、大階段の下から大勢のヴォランティアのエキストラが次々と「人間の音」を出しながら、客席の脇を通り抜けて行った(図4)。



図3 「増減の音楽」



図4 「人間の音楽」

第15回幻聴音楽会—黄昏の音楽 2001年3月11日

1991年の秋に2度目のイタリア留学から帰国した後、私はイタリアで毎日のように教会を見て回っていたように、近隣の神社をしばしば訪れるようになった。ある時、地図を眺めていたら、岐阜県安八郡神戸町に「黄昏神社」という魅力的な名前の神社を見つけた。後に「黄昏」は「たそがれ」ではなく、「おぐれ」と読むことが分かったが、その名称に惹かれ、すぐに現地へ行ってみると、黄昏神社は大垣市北の神戸町齊田地区の住宅街にあるごくふつうの小さな郷社だった。境内に社務所がなく、近くの民家で訊ねると、区長の家を教えてくれたので、さっそくこの神社でコンサートを開きたい旨を伝えた。すると区長は、それなら春に神社の祭事があるので、その日に開催してはどうかと提案した。

それを受け、私は幻聴音楽会とこの地区の祭りを合体させることを思いついた。黄昏神社の境内は、幅4メートル程の狭い道路に囲まれ、一周約100メートルある。聴衆にはその小さな境内に入ってもらい、外周道路を鈴、鐘、太鼓、ハンドベル、トライアングルなど、さまざまな楽器をもったパフォーマーたちが練り歩く(図5)。音や音楽が、聴衆の周りをくるぐると回り、最後に祭りの神輿の行列がそこに合流する(図6)という構成にしたのである。区長と話をしている中で、この地区には農業に携わる人が多く、各家にはトラクターがあることが分かったので、その神輿行列にトラクターが加わる(図7)ことも快諾してもらった。⁽²⁾

宗教行事や祭りの行列、軍隊の行進、パレードでは、音や音楽を発しながら移動する演奏形態をとる。その空間的なダイナミズムは、通常のコンサートではけっして味わえないものである。私はこれを「サウンド・プロセッション」＝「音の行列」と名づけ、「黄昏の音楽」のコンセプトとした。



図5 神社の周りを練り歩くパフォーマー



図6 祭りと合体する音の行列



図7 祭りの行列に続く農業トラクター

第 16 回幻聴音楽会ー庭園の音楽 2002 年 9 月 1 日

2002 年に「野村幸弘と幻想工房の世界」と題したオブジェ作品を中心とする個展を岐阜市の「ギャラリーなうふ」で開催する際、私はその付帯イベントとして幻聴音楽会を開くことにした。ギャラリーの近くには妙照寺があり、その美しい庭園が幻聴音楽会の舞台にふさわしいと判断した。個展の企画者であるギャラリーのオーナーが境内の使用許可を取りつけ、コンサートは実現した。打楽器奏者の片岡祐介、片岡由紀が境内の手水舎ちようずやに置かれている桶ひしゃくを使って演奏したり (図 8)、作曲家の野村誠と林加奈が飛び入りで参加して即興演奏を行ったりした。



図 8 境内での即興演奏

第 17 回幻聴音楽会ー以前の音楽 2003 年 2 月 22 日

岐阜県美術館の企画による「安藤基金現代美術コレクション展」の会期中に展示会場での関連イベントを岡田潔学芸員から依頼された。私の幻想工房の活動内容を知っていた岡田は、展示作品と音楽を関わり合わせるような内容を望んでいた。

コンサートは美術館内のハイビジョンホールで行い、2部構成とした。第1部では、館内の展示風景と監視員の動きだけを撮影した映像、片岡祐介、片岡由紀が展示作品を前にその作品と音を関連させながら即興演奏した映像を上映した。そこでは、たとえば、ドラムの形に似た抽象絵画の前に実際のドラムを置いたり (図 9)、李禹煥リーウファンの《線より》がマリンバの共鳴パイプへとあたかも連続しているようにして演奏し (図 10)、造形作品と音楽、楽器との関わりが映像化されている。



図 9 ドラムによる即興演奏

第2部では「以前の音楽」をキーコンセプトにした演奏会を行った。

「以前の音楽」とは「音楽以前の音楽」の意である。2001年から私は作曲家、野村誠の依頼で、彼が行う音楽ワークショップを映像作品にする仕事を引き受けたことから、しばしば音楽家たちと行動をともにするようになった。その際、本番での緊張感や高揚感はもちろんのことだが、それに劣らず、本番前のセッティング、チューニング、リハーサルにおける楽器の音、自然発生的なセッション、リラックスした音楽の流れる時間に大きな魅力を感じた。本番以前の音楽は、周囲の環境音、人の会話、鳥のさえずりや虫の声などと一体となり、人為的な音楽だけを特権化しない生活 (= 人生) の音楽なのである。また音楽が完成に向けてどのように生成して行くのかという過程も、「音楽以前の音楽」として非常に興味深い。美術館ホールの舞台では、作曲家の坂野嘉彦が自ら作曲した曲を、2人の音楽家が演奏する練習風景を再現し、譜面上の音符が実際どのようにして音楽として実現するのかを提示した (図 11)。



図 10 マリンバによる即興演奏



図 11 練習風景の舞台化

第 18 回幻聴音楽会ー影の音楽 2003 年 10 月 28 日

2003 年 4 月から 2004 年 2 月までの 10 か月間、私は文科省の在外研究員としてイタリアのフィレンツェに滞在することになった。フィレンツェに到着したその日から、さまざまな偶然と出会いにより、東京大学フィレンツェ教育研究センター (1999 ~ 2006 年) の土肥秀行研究員の知己を得て、センター内で幻聴音楽会を 2 度開催することができた。このセンターでは文学や美術に関する学術的なシンポジウムが開かれたり、日本の伝統文化や日本映画を精力的に紹介しており、おもに日本の文化に興味を持つイタリア人が訪れる。受付を済ませた来訪者は、照明のついた会場に足を踏み入れるのが通常だが、私はそれを逆転させて、受付で来訪者ひとりひとりにロウソクを手渡し、照明を切った真っ暗な会場に入ってもらい、来訪者は暗闇の中から聞こえてくる音や音楽をロウソクの灯り

をたよりに部屋から部屋へと探して歩くという趣向の「影の音楽」を考案した。私がここで企図したのは、聴衆の自発的、主体的な行動を促すことであった。通常のコンサートでは、聴衆は決められた座席に座らされ、自由を奪われてしまう。そして主役はもちろん演奏家であって、聴衆はたいてい暗がりの中に潜んでいる。しかしながら、「影の音楽」では演奏家の方が影の中に入り、聴衆は自ら手に持つろうソクの光に照らされ、ひとりひとりが「脚光」を浴びることになる。もちろん聴衆自身はそのことに気がつかないが、音や音楽に聴き入る聴衆の姿がいかに美しいかということにあらためて気づかされる (図 11)。



図 11 ろうソクの光で音楽を探す聴衆

第 19 回幻聴音楽会一回転の音楽 2004 年 1 月 29 日

東京大学フレンツェ教育研究センターで行ったもうひとつの幻聴音楽会のタイトルは「回転の音楽」とした。前回の「影の音楽」終演後の打ち上げに、近く中華レストランへ行った際、料理を分け合うための丸いテーブルが日本人の発案になるものだという話が出た。その時、即座に、4 人の音楽家が円卓に座り、中央の小さな回転テーブルに置いた楽譜を回しながら演奏する姿が思い浮かんだ。聴衆は音楽家たちの座るテーブルを取り囲み、彼らの肩越しに音楽を聴く。演奏家と対面するのではなく、音楽家と同じ方向を向き、テーブルの上で生じていく音楽に立ち会うという求心的な聴取形式を取った (図 12)。



図 12 回転テーブルに楽譜を載せての演奏

またレコード盤も回転することで音楽を鳴らすという類似性から、回転テーブルにレコードプレイヤーを置いて音楽をかけ、それに合わせて演奏を行った。「回転の音楽」は、イタリアからの帰国後、2004 年 5 月 16 日に第 20 回幻聴音楽会として、岐阜県美術館の多目的ホールで再演された (図 13)。



図 13 「回転の音楽」の再演

第 21 回幻聴音楽会一火影の音楽 2004 年 8 月 29 日

「火影の音楽」は、蒲郡商工会議所主催の「がまごおり市制 50 周年記念のパブリックアート・プログラム」として「うみ／そらの音楽会」を企画した高橋綾子から委嘱されて制作した作品である。会場は愛知県蒲郡市の三河湾に面した 7 ヘクタールの東港埋立地と決まっていた。蒲郡商工会議所の意向は、東港埋立地は堤防に遮られ、市民が目にすることがないため、実際に現地でその空間・場所を体感し、埋立地に関心を持ってもらうことだという。「うみ／そらの音楽会」のリーフレットには「期間中は、多くの皆さんが東港埋立地の会場を訪れ、散策しながらユニークなアート作品や音楽を享受されました。また、現地の光・音・風・海の香りも体感して頂けたと思います。この企画によって、市民の皆さんの「将来の蒲郡」や「蒲郡の観光」に対する認識を高める方向へもっていったなら幸いです」と記されている。⁽³⁾ これはアート・イベントがその場所を再認識し、魅力を高め、観光などの経済活性化に繋がるのではないかと地方自治体が考え始めたことを示しているだろう。イタリアでの幻聴音楽会を見た高橋は、場所の特性を最大限に生かそうとする私の発想や演出が、こうした地方のニーズに応えることができると判断したにちがいない。

作品の委嘱を受けてまず行うのは、現地の下見である。東港埋立地に行ってみると、そこは本当に何も無い漂渺とした草地だった。正直、ここで何ができるのかと、私はしばし途方に暮れた。しかし実際は、何も無い、ということはないのである。埋立地を隅々まで歩くと、所々に朽ちかけた板で作られた囲いがあることに気がついた。これが発想の手掛かりとなり、私はまずこの木柵を白いペンキで塗ってみた。すると緑地によく映えて、インスタレーション作品のように見えた。それなら、この埋立地に廃品となった家具を白くペイントしてレイアウトすれば、壮大なインスタレーション作品ができると考えた。蒲郡市役所が回収する廃品の家具類を廃棄せずに保管してもらうよう依頼し、集まった家具類を商工会議所から提供されたスペースに運び込んだ。そして高橋と彼女の所属する名

古屋芸術大学の学生ヴォランティア、商工会議所の人たちの協力を得て、100を超えるそれら廃品をすべて白のペンキで塗装し、東港埋立地にレイアウトした (図14)。(4)

作曲家の山辺義大と坂野嘉彦には現地まで来てもらい、このインスタレーション作品の間を散策したり椅子に腰かけたりして、潮風にあたりながら聴くのにふさわしいと思われる音楽の作曲を依頼した。夏の会期中 (8月12日から29日までの18日間)、ここを訪れる観客には携帯用のCDプレイヤーを貸与して、音楽を聴きながらこの広大な緑地を歩いてもらった。曲によって同じ風景がふだんとちがって見えるのは、多くの人たちがしている経験だろう。私はこの体験型のインスタレーション作品を「音象風景」と名づけた。

会期最終日の夕暮れ、私はひとつひとつの家具に点火し、その炎の間を演奏家が動きながら音楽を奏でる幻聴音楽会「火影の音楽」を開催した (図15)。演奏会のフィナーレでは、蒲郡市の小中学校などに呼びかけて、子どもたちを含む、大勢の地元ヴォランティアが片手に松明の火を持ち、もう片方の手で鈴を鳴らしながら、遠くの暗闇から現れ、立ち去って行った。

第22回幻聴音楽会ー照明の音楽 2008年3月9日

浜松市で戦災から焼け残ったわずか2つの建物の内、旧銀行協会は建築史的観点からすでに保存が決まっていたが、もうひとつ、道路を挟んだ向かい側に建っている鴨江別館は取り壊されようとしていた。これを何とか残そうとして、NPO法人クリエイティブサポートレッツ主催の「浜松アートフォーラム～地域にアートができること」が鴨江別館で開かれることになった。私はこのシンポジウムの後、会場となる建物で幻聴音楽会を行うよう依頼され、すぐに現地を訪れた。

鴨江別館は以前 (1928～70年)、警察署の庁舎で、建物はたしかに古びていて老朽化していたが、ふだんは市民の音楽の練習、会議などに利用されており、照明だけは各階すべて問題なく点灯していた。照明がアクティブなら、この機能を最大限に生かそうと私は考えた。鴨江別館には音楽家を入れ、中で演奏してもらい、音は建物の外に設置したスピーカーから流し、聴衆は向かいの旧銀行協会で聴くという、通常では考えられない形式を取った (図16)。道路をまたぐコンサートなので、警察の許可を取り、当日は浜松市役所の職員が周辺の警備にあたることになった。

建物内ではマリimbaの二重奏や打楽器による即興演奏などが行われ、そのリズムに合わせて、各階にある照明のスイッチボタンを子どもたちが操作することで、音楽と点灯・消灯を繰り返す光との競演が繰り広げられた。コンサートのクライマックスは、すでに建物内で曲目を終えた合唱団 (ヴォア・ヴェール) と吹奏楽団 (浜松ブラスバンド) が演奏しながら鴨江別館を出て横断歩道を渡り (図17)、聴衆のいる向かいの旧銀行協会の中へ入ってそこで演奏を終える (図18) という演出である。ここで演奏会が開かれていることを知らない通りがかりの人たちが、信号待ちをしながら歌い、奏でる大勢の演奏家を立ち止まって見ていた姿が非常に印象的だった。



図14 廃品家具のインスタレーション



図15 燃えるインスタレーション作品



図16 旧銀行協会の窓から向かいの鴨居別館内で行われている演奏会を聴く聴衆



図17 歌いながら横断歩道を渡る合唱団



図18 旧銀行協会でのフィナーレ

第23回幻聴音楽会—街路の音楽 2008年3月30日

「照明の音楽」が終わるとすぐにクリエイティブサポートレッツ理事長の久保田翠から、今度は浜松市南区にある遠州浜団地の商店街を活性化させるために幻聴音楽会を開けないかと打診された。下見に行くと、商店街にひと気はなく、ほとんどの店が閉まっている、営業しているのは魚屋と蕎麦屋など、数軒しかなかった。

浜松の遠州浜を訪れて、商店街の空洞化は岐阜に限らず、全国のどの地方都市にも共通していることを痛感したが、この場所にとくに目立った特徴があるわけではなかった。ただ、この商店街にしばらく逗留していると、路線バスが15分くらいの間隔で、比較的頻繁に運行していることに気がついた。そこで私は浜松在住の音楽家たちが各自楽器を持って15分おきにバスに乗り、遠州浜商店街に続々と到着して、街のあちこちで小さなコンサートを開くという「街路の音楽」を構想した(図17)。道路のあちこちにドラム缶を置いて、そこで焚火をするだけで、そこは一気に映画のセットのような雰囲気になった。

片岡祐介とクリエイティブサポートレッツの子どもたちで結成したロック・バンド(13:47着のバス)(図18)、地元で活動するフォーク・グループ(14:17着)(図19)、ガムラン・グループ(15:01着)、草笛の名人による演奏をはじめ、書家のパフォーマンスやブラジルの少年たちによる麻薬撲滅を訴える寸劇なども路上で行われ、商店街に一時的な賑わいが戻ることになった。

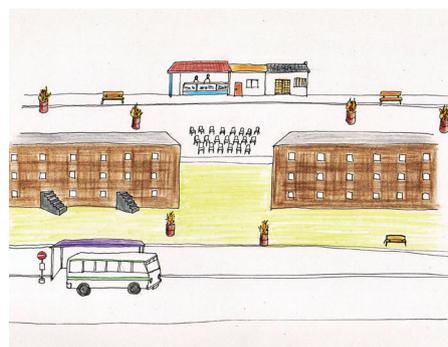


図17 野村幸弘「街路の音楽」のイメージ画



図18 子どもたちのロック・バンド演奏



図19 会場に到着したフォーク・グループ

第24回幻聴音楽会—講義の音楽 2008年7月22日

幻聴音楽会を開催するにあたり、毎回、苦労するのは、広報と集客だった。私が大学で開講している授業のひとつに、毎週1回、かならず100名近い学生が出席する科目(「美術史」)があるのだが、ある時ふと、この講義室で幻聴音楽会を開けば、広報と集客の手間が省けることに気がついた。それで私は授業で使うパワーポイントに坂野嘉彦のオリジナル曲を入れ、いわばBGM付きの講義を行った。受講者の席には音楽家が数人、楽器を持ってあちこちに座っており、授業も終盤に近づくと、パワーポイントの音楽に合わせて受講者席で生演奏が始まり、受講者からは思わず笑みがこぼれる。最後はすべての音楽家が教壇の周りに集まってきて一斉に演奏を終える、という講義形式のコンサートとなった。パワーポイントの最後にキャスト、スタッフのクレジットが流れたところで、受講者たちからは盛大な拍手がわいた。



図20 講義室の座席から教壇に向かう演奏家

第25回幻聴音楽会—奇数の音楽 2008年10月19日

2008年の春、岐阜市内にある3階建ての民家を借りて改装し、私の絵画作品やオブジェを展示する個人ギャラリーを兼ねたスペース「アトリエ幻想工房」を作った。幻聴音楽会は25回目を迎え、この年私は47歳、作曲家の坂野嘉彦は43歳で、さまざま点で共通するのが奇数であったことから、タイトルを「奇数の音楽」と決め、坂野をはじめ5人のクラリネット奏者が「アトリエ幻想工房」の1階から3階、屋上までの垂直軸を使って、重層的なコンサートを作り上げた(図21)。



図21 「アトリエ幻想工房」でのクラリネット演奏

第 26 回幻聴音楽会ー運河の音楽 2009 年 3 月 21 日

浜松で開催した第 23 回幻聴音楽会「街路の音楽」に、はじめは観客として見ていたが、途中から飛び入りでコンサートに参加した神戸大学の沼田里衣研究員が、非常に楽しかったので、こういうコンサートを神戸でもやりたいと私に言った。それからほどなく沼田から、文科省の現代 GP「アートマネジメント教育による都市文化再生」事業の一環として幻聴音楽会を開くために、私にゲストアーティストとなるよう依頼した。それを受け、私は毎月のように神戸に足を運んで、幻聴音楽会を 1 年がかりで準備した。⁽⁵⁾

2008 年 11 月に神戸に行き、あらかじめ神戸大学の大学院生たちが幻聴音楽会の開催地として候補に挙げていた神戸空港、摩耶山、長田町商店街、旧居留地などを視察し、協議の上、兵庫運河の周辺がもっともふさわしいと判断した。開催地が決まった後は、運河周辺を丁寧に見て回り、造船所、釣舟の停泊所、材木運搬用のクレーン操作場、レガッタ競技場など、ここを舞台にコンサートをすれば魅力的になるにちがいないと思われるポイントが次々に見つかった。沼田をはじめ、大学院生たちは精力的にその地域に入っていく、地元の人たちに聞き取りをしながら、さまざまな情報を入手していった。そこから戦没者、震災で亡くなった人たちの鎮魂のために法螺貝を吹く修験道者、高齢者施設のハンドベルグループ、和太鼓のグループ、ハーモニカの名人らとコンタクトが取れ、出演の快諾が得られていった。

プログラムは、昼の 12 時 15 分に神戸ドッグ前で法螺貝に始まり、13 時 15 分から新川運河で和太鼓とダンスの競演、14 時 30 分から日清製粉前でのブラス演奏、15 時からクレーン操作場で打楽器による即興演奏、そして最後に、15 時 30 分から 16 時 30 分まで、すべての参加者が兵庫運河のレガッタ競技場に集結し、神戸大学競技ダンス部のメンバーが場を盛り上げた (図 22 ~ 26)。そのほか、運河沿いにはサウンド・アーティストによる作品が設置され、さまざまなパフォーマンスもゲリラ的に行われた。こうして「運河の音楽」は、全長 2.5 キロの運河沿いで 4 時間以上も続く大音楽会となった。聴衆はリレーのように受け継がれていく各コンサートを歩いて追いかけてたり、舟に乗って運河の水上からも鑑賞できるようにした (図 27)。

本番当日、私は現場で指示を出しながらビデオカメラを回し、そのほか 3 人のスタッフに撮影してもらった映像を編集して 45 分ほどの映像作品にまとめ、コンサートの 2 か月後、兵庫運河レガッタ艇庫で上映した。上映後、私はコンサート会場となった兵庫運河沿いをあらためて歩いてみた。運河は、ひと気がなくひっそりと静まり返り、いつもの姿に戻っていた。ところが不思議なことに、行く先々で当日の演奏やパフォーマンスの記憶がよみがえり、私は幻視と幻聴の感覚に襲われた。コンサートが終わってしまえば、音や音楽はあとかたもなく消え失せてしまう。ただし、コンサートの行われた場所がそこにあるかぎり、そこに佇めば、音や音楽はおそらく何度でも再生されるにちがいない。どこからともなく聞こえてくる音や音楽をコンサートにした幻聴音楽会は、コンサートが終わった後もずっとその場所に幻聴を生じさせることを、私はその時、実感した。



図 22 ドッグ前での法螺貝演奏



図 23 ドッグ内でのブラス演奏



図 24 修験道者とハンドベルのグループ



図 25 和太鼓とダンスの競演



図 26 フィナーレのダンス



図 27 舟の上から鑑賞する聴衆

第27回幻聴音楽会—美術館の音楽 2009年11月14日

岐阜県美術館の廣江泰孝学芸員から企画展「クロスアート2」の付帯イベントで何かできないかという依頼があり、すでに「以前の音楽」を館内の展示室で開催していたので、私はぜひ今度は美術館の前庭でやりたいと申し出た。というのも、日本の美術館は外来の制度で歴史が浅く、まだ日本に根付いていないせい^{ためら}か、国公立、私立を問わず、敷居が高く気軽に入ることが躊躇^{ためら}われるからである。これまで使われてこなかった美術館の前庭をフルに活用し、美術館近隣の、美術にあまり関心をもたない人にも美術館の前庭に来てもらい、そのアメニティ空間を再認識することをねらいとした。

神戸での「運河の音楽」の経験から、私はできるだけ岐阜県美術館の近くに住んでいる人や学校の協力を取り付けて、出演者とプログラムを決めようと考えた。加納高校美術科、陽南中学校美術部、岐阜大学教育学部附属中学校の合唱部と養護学級の生徒たち、岐阜大学美術教育講座1年生、岐阜大学地域科学部の教員らに声を掛け、総勢100人を超える出演者が前庭に結集し、そこでさまざまな演奏、パフォーマンスを披露した。

プログラムは、前庭の芝生を刈る芝刈り機のエンジン音を通奏低音にした演奏、ピアニスト岡野勇仁による即興演奏、FC岐阜のサッカー選手3人がリフティングしているそばに演奏家が立ち、ボールの当たるからだの位置が楽譜となって、音が繰り出される「リフティングの音楽」(図27)、私が作詞して、作曲を鷺見祐司、編曲を坂野嘉彦が行った岐阜県美術館の歌「ルドンの花」、中学生の合唱団が歌いながら自転車で前庭の通路を走り回る「合唱自転車」(図28)、片岡祐介と中村武文が養護学級の生徒たちとセッションする打楽器の即興、スーラの絵画作品を再現するパフォーマンス「グランド・ジャッドの音楽」(図29)。これらの曲目の大半を坂野嘉彦が作曲した。コンサートの最後は、情報科学芸術大学院大学メディア文化センターの河村陽介が「MOBIUM」と名づけたアートバスで美術館に乗り付け、そこで大団円を迎えた(図30)。

第28回幻聴音楽会—照明の音楽 II 2010年4月17日、24日

2008年に「浜松アートフォーラム」で基調講演を行った北川フラムが、シンポジウム後に開催した「第22回幻聴音楽会—照明の音楽」を見た後、私にこういう音楽イベントをぜひやりたいと言った。それから1年ほど経ったころ、北川からの電話で「徳島LEDアートフェスティバル2010」で「照明の音楽」をやってほしいと依頼された。開催場所は徳島市の新町川に面したポンプ場が指定されていた。場所が変われば、同じ「照明の音楽」でも内容はまったく異なってくるので、単なる再演とはならない。私はまずポンプ場の照明計画を立てた(図31)。そして毎月、徳島へ通って、NPO法人 commons の笠井義文らの協力で、地元の音楽家や吹奏楽団、合唱団の出演を取り付けた。それをもとに私は音楽会のイメージ画を描いた(図32)。ポンプ場の屋上にシンバル隊、新町川にかかる橋の両端で行うドラムの掛け合い、舟に乗って歌う合唱団、LEDライトを装着したポールを持って川べりを行進するエキストラの人たち。

シンバル隊は鴨島ウィンドアンサンブルから6名、合唱舟には混声



図27 リフティングの音楽



図28 合唱自転車



図29 グランド・ジャッドの音楽



図30 フィナーレに登場した「MOBIUM」



図31 ポンプ場の照明計画

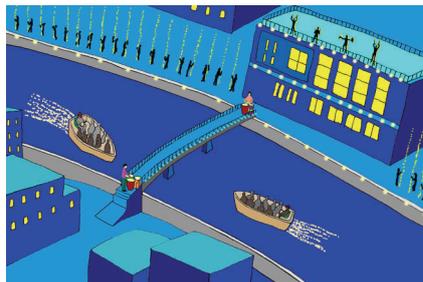


図32 野村幸弘「照明の音楽 II」のイメージ画

コーラス・アンダンテ 17名、メープルエコー川島 10名、トライアングル&モデラート 15名のメンバーが乗り、川べりで行う演奏は徳島吹奏楽団 33名、城北高等学校吹奏楽部 35名、徳島市立高等学校一ケストラ部 12名、城東中学校ウィンドオーケストラ部 12名、ハンドベル・キャンドル隊は徳島文理大学短期大学部 27名とアン・モデルエージェントの 22名。それに加え、新町川近隣の東船場、富田浜、南内町 1・2・3丁目、緑地通り、幸町 2丁目の各町内会、新町、東富田コミュニティ、渭北街づくり、渭東コミュニティの各協議会、信愛幼稚園、徳島市婦人連絡協議会、ガールスカウトの総勢約 350名の地元市民が、LED 隊としてコンサートの終盤、川べりを練り歩くという、徳島市民と徳島市役所の職員あがての、街を舞台にした壮大なアート・パフォーマンスとなった (図 33)。とくにコンサート後の参加市民たちの熱狂ぶりは、今でも忘れられない (図 34)。(6)

第 29 回幻聴音楽会—庭師の音楽 2010 年 10 月 9 日

2010 年 6 月に浜松の NHK 文化センターからの依頼で「印象派と浮世絵」というテーマでレクチャーをした。それを浜名湖ガーデンパークの「花の美術館」でモネのジヴェルニーの庭園を再現したという庭師の井村義人と土岐智彦が研修として聴講にきていた。その後すぐに「花の美術館」の管理会社「葉音」の佐原宏康が岐阜大学の私の研究室を訪れ、その庭園を見に来てほしいと言った。庭園を維持するだけでなく、この場所と創造的に関わっていくアート・イベントをやりたいというのである。

私は 8 月初旬にその庭園を見に行った。園内中、花の咲き乱れる庭は隅々まで手入れが行き届いており、モネの別荘の再現ぶりはみごとだったが、その完璧さゆえに、ここで何をしてもすべてが蛇足であるように思われた。その時、私の目に飛び込んで来たのは、庭園のあちこちで手入れに余念のない庭師たちの姿だった。彼らが手にした木バサミや刈り込みバサミのするどい音、脚立を折り畳む軽快な金属音、芝刈り機のうねるエンジン音、スプリンクラーの空気を切りさく爽快な飛沫音に気がついたのである。陽光のもとにある庭園の美を、陰で支える庭師たち。この光と陰を逆転させるために、庭師にまじって庭園の音の中に音楽家たち、パフォーマーたちが入り込む。その時、庭師は音楽家となり、庭園全体が新たな芸術的空間となると考えた。

曲目は、庭師の^{せんてい}剪定の音と共演する「ハサミの音楽」、積み藁の中に音源を仕組んだ「一輪車の音楽」(作曲：岡野勇仁)、睡蓮の池に浮かべた舟の上で演奏する「笛の舟」(図 35) (作曲：坂野嘉彦)、片岡祐介による打楽器即興の「チェーンロックの音楽」、「スプリンクラーの音楽」(図 36)、「芝刈り機の音楽」(図 37)などで構成した。

第 30 回幻聴音楽会—陶芸の音楽 2013 年 6 月 1 日

岐阜県多治見市にある現代陶芸美術館の村山閑学芸員から「陶芸の魅力× アートのドキドキ展」の関連企画で幻聴音楽会が開催できないかという依頼を受けた。磯崎新設計の建物は、里山の地形が活かされ、屋上に入口があり、下の階が展示室となっている。館内に入ると、どこの美術館もそうだが、明るくて美しい端正な空間が設えられている。しかし土と炎で出来上がった陶器の自然の荒々しさや熱やエネルギーが、そこにはまったくなかった。それで私は広く平坦な屋上に、煉瓦作りの窯を^{かま}何基か設置して、もうもうと煙の立ち込める中でコンサートをやりたい

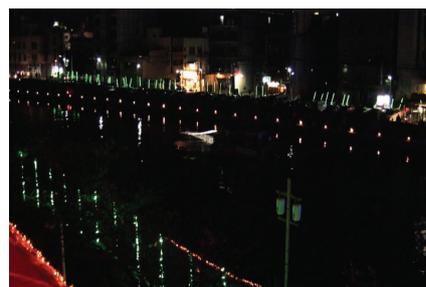


図 33 実際のコンサート風景



図 34 盛り上がる LED 隊



図 35 「笛の舟」



図 36 「スプリンクラーの音楽」



図 37 「芝刈り機の音楽」

と思い、イメージ画を描いた(図37)。国際園芸アカデミーの相田明に日干し煉瓦制作の指導を、多治見工業高校の手島敦と伊村俊見に窯の組み立て方を依頼し、公募したヴォランティアの人たち、岐阜大学美術教育講座の1年生らとともに窯を制作した。窯に入れた薪とスモーク用のチップに点火して出る煙を通して、マイクで増幅された炎と薪の音、口琴、カリンバ、鍵盤ハーモニカ、太鼓の音、陶片を打ち合わせる音などが断続的に聞こえ、コンサートのフィナーレには金管楽器のマーチングが忽然と出現するのである(図39)。

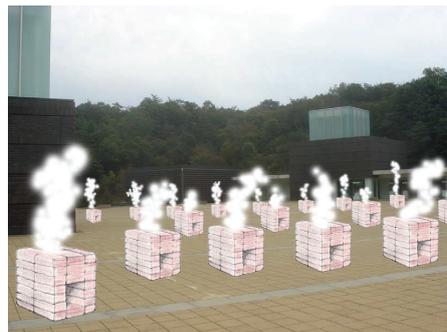


図38 野村幸弘「陶芸の音楽」のイメージ画

第31回幻聴音楽会—1.7kmの音楽 2013年10月13日

NPO法人愛岐トンネル群保存再生委員会が主催し、名古屋芸術大学の高橋綾子のキュレーションで「荒野ノヒカリ」というイベントが「あいちトリエンナーレ2013」のパートナーシップ事業として開催されることになった。愛岐トンネルは、庄内川に沿って愛知県春日井市から岐阜県多治見市へ抜ける鉄道トンネルとして作られたが、現在は廃線となり、2009年に愛知県側1.7km区間にある3～6号トンネル4基が経済産業省「近代化産業遺産33」に認定され、地元のNPO法人が維持管理にあっている。そこでこの1.7kmの暗闇の空間を生かして幻聴音楽会を開催することが求められた。14人の音楽家がトンネル内では口笛の多重奏、手拍子・足拍子の音楽、ハーモニカ多重奏(図40)、リコーダーの八重奏とヴォーカルの五重奏を、トンネル間の藪の中では、竹藪と草叢で自然の音を引き出しながら、1.7kmを踏破し、聴衆はその音楽行進の後に従って鑑賞するという形式をとった。また前もって片岡祐介と制作した映像作品「場所の音楽～愛岐トンネル群」をトンネル内の壁面に投影し、その映像の音楽ともシンクロさせるという演出を行った。⁽⁷⁾



図39 煙の中で演奏する吹奏楽団

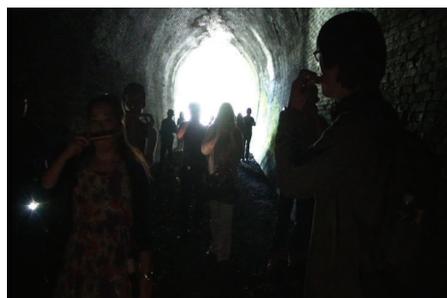


図40 トンネル内でのハーモニカ多重奏

おわりに

1995年に始めた幻聴音楽会は、当初、私の住む岐阜を中心に開催してきたが、2003年のイタリア滞在以降、「火影の音楽」は愛知県、「照明の音楽」「街路の音楽」「庭師の音楽」は静岡県、「運河の音楽」は兵庫県、「照明の音楽II」は徳島県というように、次第に県外での活動へと広がって行った。その際、重要になったのは、開催地での受け入れ態勢だった。とくに「街路の音楽」では、NPO法人クリエイティブサポートレッツのスタッフだった片岡由紀が、地元の人的資源を発掘し、直接コンタクトを取って幻聴音楽会の趣旨を説明し、確実に協力を得ていった。「運河の音楽」では神戸大学の沼田里衣と沼田苑子が、「照明の音楽II」ではNPO法人コモンズの笠井義文や町内会を統率した小林正行がその役割を十全に果たした。⁽⁸⁾ 彼らの幻聴音楽会のコンセプトに対する理解と共感、そして周到かつ実践的な準備がなければ、とうていコンサートは実現しなかつただろう。それだけではなく、彼女らはコンサートの開催場所の特性を深く洞察し、さまざまなアイデアを積極的に出して、私はそれらをプログラムの中に取り入れていった。また「階段の音楽」「火影の音楽」「運河の音楽」「美術館の音楽」「照明の音楽II」では、数十人から数百人という大勢の地元市民が参加したが、それはやはり幻聴音楽会というアート・イベントに関心を持つ人たちが、つねに一定数いたことを示しているだろう。

幻聴音楽会を委嘱した主催者側の開催意図は、おもに衰退する地域の活性化(「照明の音楽」「街路の音楽」「運河の音楽」「照明の音楽II」「1.7kmの音楽」)にあり⁽⁹⁾、公立の美術館はおそらく企画展覧会の広報、集客が目的だったと思われる(「以前の音楽」「回転の音楽II」「美術館の音楽」「庭師の音楽」「陶芸の音楽」)。そうした目的を持たず、もっぱら芸術的な意図から開くことができた幻聴音楽会が、日本ではなくイタリアにおいてだったことは非常に興味深い。芸術を芸術として享受するという生活が定着しているからだろうか。実際、フィレンツェで行った「影の音楽」と「回転の音楽」での聴衆の反応はよく、作品自体の意味や価値を的確に論じる人たちがいた。幻聴音楽会

のコンセプトを丁寧に説明する必要がまったくなかったのである。これは、後に野村誠とともにイングランドやオーストリア、タイやインドネシアで活動した時にも経験した。日本では地域に入って作品を制作する際、否応なしにそこに行政が介入してくるため、開催意図や目的が多くの人に理解され、受け入れやすいものであることが必要となる。つまりかならず説明責任が求められるのである。

幻聴音楽会の表現^{かなめ}の要は、デュシヤンによるレディ・メイドのオブジェ以降、あらゆるものが芸術になり得ることになった現代アートの状況の中で、芸術と非芸術、日常と非日常、現実と虚構を交錯させることにある。⁽¹⁰⁾「以前の音楽」では音楽と音楽以前が融合し、「影の音楽」では聴衆が、「庭師の音楽」では庭師が主役となる。火影の音楽」では廃品、粗大ごみがオブジェ化し、「美術館の音楽」では前庭の芝生がグランド・ジャッド島となり、「照明の音楽」、「照明の音楽 II」では建物全体が巨大な音響装置に変貌した。

2013年の第31回を最後に、それ以来、幻聴音楽会は開かれていない。その理由のひとつは、こうした表現意図を実現するには、もっと他の方法の可能性を探る必要があると考え始めたからである。もちろん、これまでも作品の委嘱がなくとも、「黄昏の音楽」、「講義の音楽」、「奇数の音楽」のように、自主公演を行うことで幻聴音楽会は継続してきた。その一方で、私は幻聴音楽会と並行して、片岡祐介、片岡由紀とともに映像作品「場所の音楽」シリーズを2001年から開始し、野村誠とのコラボレーションを盛んに行うようになった。2005～2006年には坂野嘉彦と、2007～2015年には岡田加津子と「映像+音楽」の制作に携わった。また2011年から「映像美術史」という新たな試みを始め、そうして私は次第に映像制作の方へとシフトして行くことになった。これらの表現活動については、稿をあらためて論じようと思う。

註

- (1) 野村幸弘「幻聴音楽会とは何かー音楽の場所と聴取形式の問題について」日本バックグラウンド・ミュージック協会、1999年、1-14頁。
- (2) 当初、開催資金も助成金もなく、赤字覚悟で計画、実施したが、コンサートの最後に区長から分厚い封筒のご祝儀をいただいたことで、最終的には黒字となった。
- (3) 高橋綾子編『うみ／そらの音楽会』名古屋芸術大学、2004年、12頁。
- (4) 野村幸弘「場から作る共同アート」『朝日新聞』2004年7月14日（水）朝刊。
- (5) 「運河の音楽」の制作過程、キャスト、スタッフをはじめ、このプロジェクトに関わった人たち、コンサートを体験した観客の感想については、沼田里衣「公共性の観点からアートとコミュニティについて考えるー「運河の音楽」の事例とともに」『公共文化施設の公共性』（藤野一夫編）水曜社、2011年、194-220頁、および「神戸コミュニティアート制作日記」（<https://riinumata.hatenadiary.org/>）を参照。
- (6) 『ひょうたん島を舞台に 徳島 LED アートフェスティバル 2010 記録集』徳島 LED アートフェスティバル実行委員会、2010年、14-15、50-53頁。
- (7) 高橋綾子編『愛岐トンネル群・アートプロジェクト 2013 荒野ノヒカリ [記録]』NPO 法人愛岐トンネル群保存再生委員会、2013年、14-15頁。
- (8) 小林本人談によると、すでに2007年の映画『眉山』の撮影時に、大勢のエキストラを集めた経験があったという。
- (9) 「照明の音楽」の舞台となった鴨江別館は、その後、耐震工事が行われ、2013年に市民の芸術活動の拠点として鴨江アートセンターに生まれ変わった。間接的に聞いた話だが、鴨江別館の取り壊しはすでに議会で承認されていたが、当時の浜松市の市長が全国放映のテレビ番組で、鴨江別館をアートセンターとして再生すると発言したため、取り壊しが撤回されたという。鴨江別館で開催したシンポジウムがそうした流れを作り出したのかもしれない。
- (10) 野村幸弘「場所の芸術 (1) ー初期のダンス公演と幻聴音楽会」『岐阜大学教育学部研究報告ー人文科学』第69巻 第2号、2021年、85-94頁。

* 本研究は、科学研究費の助成による基盤研究B「社会とアートの共進化的動態とartificationの諸相に関する領域横断的研究」（課題番号：20H01576）の成果の一部である。

